

大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発（11）

—教育系学部学生における集団討論における360度カメラによる行動変化の分析—

○山本文枝¹・西川ひろ子²・西まゆみ¹

(¹安田女子大学心理学部・²安田女子大学教育学部)

目的と目的 本研究は、大学教育の中でコミュニケーション能力を育成するためのカリキュラムの開発を目的としている。特に、発達障がいによる二次障害の問題に配慮し、コミュニケーション・スキルに加え、自己概念の肯定的変化をねらう。今回は、集団討論後のフィードバック(以下、FB)が、その後の集団討論の行動にどのように影響するのかについて検討を行った。討論中の行動を360度カメラで撮影し、集団の中で自閉症スペクトラム指数が比較的高い学生の行動変化に注目して検討した。

方法 実験協力者 教育系学部所属する女子大学生(3年生)39名。そのうち、質問紙データに欠損値のあった3名を除く36名を分析対象とした。平均年齢21歳であった。**実施時期** 2019年3月。**集団討論の実施方法** 7～8名ずつ5つの集団にランダムに割り当て、15分間の集団討論を週1回連続3週間、合計3回実施した。集団は、①教師によるポジティブFB(行動の良い部分を伝える)のみ、②教師によるポジティブFBと課題FB(行動の課題を伝える)、③FBなし(統制)、④学生相互によるポジティブFBのみ、⑤学生相互によるポジティブFBと課題FBの両方の5条件に割り当てた。**手続き** 実験協力者は実験室に入室後、指定された席に座った。事前の質問紙調査を実施(1回目のみ)、討論テーマを説明後、自己他者評価シートを配布し、各自で討論時の望ましい行動ポイント10個を確認してもらった。その後、集団討論(15分)、FB時間(10分)、自己他者評価シートを記入、3回目は事後の質問紙調査を実施した。**質問紙の構成** ①自己概念の形容詞(榎本(2002)から抜粋)、②自閉症スペクトラム指数(以下、AQ)日本語版(若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004) (②は事前のみ)、③ENDCOREs(藤本・大坊, 2007)、④自己肯定意識尺度(平石, 1990)。**360度カメラによる撮影** Kodak PIXPRO SP360を使用した。集団全員の表情やしぐさ、会話のやりとりの方向、発話時間等の観察を目的とした(写真1)。**倫理的配慮** 個人情報保護され研究以外の目的では使用しないこと、参加

は自由意思で中止でき、成績評価等の不利益はないこと等を伝え同意した協力者が参加した。課題FBのみの条件は設けないこととした。

結果と考察 ①②条件のAQが最も高かった協力者のうなづきの回数、発話時間(sec)を計測した(Figure 1)。①条件の1回目ポジFBは「進んで司会や発言をした」、2回目ポジFBは「相手の発言を促した」であっ

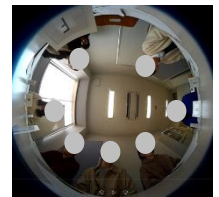


写真1 360度カメラで撮影した集団討論の画像の例

た。②条件の1回目ポジFBは「うなづきをしていた」、課題FBは「発言がなく聞くことのみだった」、2回目ポジFBは「相手の意見に同意していた。笑顔がよかった」、課題FBは「自分自身の呼称について」であった。対象者・状況のベースラインは異なるが、どちらの条件においてもポジティブFBがより行動の変化に影響を与えた可能性が推察された。

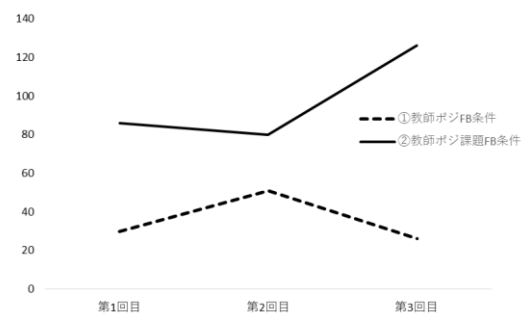


Figure 1 教師によるポジティブフィードバックのみ条件とポジティブ・課題フィードバックの両方の条件における「うなづき」行動の回数。

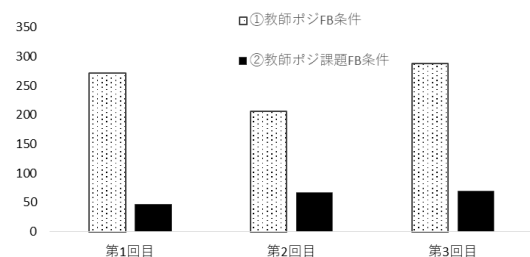


Figure 2 教師によるポジティブフィードバックのみ条件とポジティブ・課題フィードバックの両方の条件における発話時間(sec)